doi：10.20776/S13482084-68-P25
千葉大学教育学部研究紀要　第68巻　25～31頁（2020）

教育心理学史序説　―第１報―

大　芦　　治[1)]
[1)] 千葉大学・教育学部

The Introduction to the History of Educational Psychology (1)

OASHI Osamu[1)]
[1)] Faulty of Education, Chiba University

心理学史研究の中で，教育心理学の歴史に関する研究は現在に至るまでほとんど行われていない。本稿では，教育心理学の歴史の素描を試みた数少ない研究者の一人であるD.C.Charlesの記述をもとに，19世紀前半のアメリカの教員養成教育の中で心理学教育がはじめられていたこと，それらがスコットランド学派哲学の流れを汲むものであったこと,などを紹介した。また，それらに加えて，当時の教科書の内容などについても検討を試みた。

So far few studies have been reported on the origins of the educational psychology in the field of the history of psychology. In this paper, the author tried to examine the origin of the educational psychology on the basis of Charles ‘s (1976, 1987) articles, which were only two studies on these fields. It is clarified that in the first half of nineteenth century, courses on psychology were offered as “mental philosophy” in normal schools, which could be considered as an origin of educational psychology; the “mental philosophy”, however, had its origin in philosophy of Scottish School of Common Sense; the course contents of “mental philosophy” were totally different from today’s educational psychology. More studies, especially on the lectures of psychology from 1870s to 1890s, are needed to reveal the origin of today's educational psychology.

キーワード：教育心理学（Educational Psychology），心理学史（History of Psycholog），
スコットランド学派（Scottish School of Common Sense），師範学校（Normal School）

はじめに

本稿では，教育心理学（educational psychology）の初期の歴史に関して，著者が調べて理解したことを，とりあえず，報告したい。とりあえず，などというのは，著者自身とてもこれが十分なものと思っていないからである。にもかかわらず，このようなものを公表しようと思ったことにはそれなりの理由がある。

著者は，2016年に「心理学史」（大芦，2016）を上梓した。同書の執筆に際し，著者は多くの内外の心理学史の概論書を収集し参考にしたが，その際気づいたのは，それらの中に教育心理学の歴史に関して独立した章をもつ著書が全くないということであった。そのため，自著には何とか教育心理学の歴史に関する章を含められないものか検討したが，結局，果たすことができなかった。なぜ，それができなかったというと，教育心理学の歴史に関する章を執筆する手掛かりになるような先行研究がほとんどなかったからである。もちろん，歴史を記述するに際してはできるだけ一次的史料にあたるのが基本だろうが，実際のところは，二次的史料，研究論文などにあたり，それらを入り口にすることも多いはずである。しかし，そうした入り口となる資料がほとんど見当たらず，どこから手をつけてよいかわからなかったのである。

教育心理学の歴史に関する研究では，その一領域と考えられる知能の測定についての多くで文献がある（たとえば，Chapman, 1990）。しかし，学習，発達，知能の測定といった，今日，教育心理学の中心的なテーマと考えられている内容を含め教育心理学を一つの領域として扱っている歴史研究は，心理学の他分野の研究と比べると極めて少ない。おそらくその理由は，一般に教育心理学といわれる分野が，学習，発達，知能の測定といった心理学の領域の知見を寄せ集めることで成り立っているように見えるからである。つまり，心理学の通史では，学習，発達，知能の測定といった各領域の歴史を描けばとりあえずは事足りてしまうので，それらの寄せ集めに過ぎないと考えられている教育心理学の歴史について，改めて，とりあげる必要がないと思われているのであろう。しかし，そうやって学習，発達，知能の測定といった領域の歴史としてまとめておけば教育心理学に関する歴史は不要だといってよいのだろうか。著者にはどうもそのようには思えなかった。教育心理学が一見すると学習と発達，そして，知能の測定研究の寄せ集めのような分野として見えるにせよ，教育心理学という一つの領域として体裁を保っているのは，それなりの歴史的な背景があり，一領域として扱う意味があるからなのではないか。もしかすると，教育心理学を一つの領域としてとらえその歴史

連絡先著者：oashi@faculty.chiba-u.jp

を改めて概観してみることで，学習，発達，知能の測定といった個別の歴史を描く中で落ちてしまったものも見えてくるのではないだろうか。著者はそう考えた。

とはいえ，前述のように，現時点では手掛かりとなるような史料もほとんどなく，その作業は非常に困難が伴う。ただ，そうやっていつまでも踏みとどまっていても何も生まれてこないだろう。

そこで，今回，あえて，教育心理学を一つの領域として扱いその歴史を描く本稿の執筆を試みることにした。もちろん，十分な史料もそろっていない現状において，本稿は到底満足行くものとはなりえないだろう。しかし，それが，将来，本格的な教育心理学の歴史を描くための手がかりのようなものになれば，と考えている。

教育心理学のはじまりはいつごろか

今日出版されている教育心理学の概説書の多くにはその歴史的な記述はない。ただ，心理学史の概論書の中にはHerbartが教育心理学の創始者であるという記述を，時折，見かけることがある（たとえば，Kardas，2014）。また，教育学史の概論書では，J.F.Herbart（1776-1841）が「一般教育学（Allgemeine Pädagogik aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet）」のなかで「科学としての教育学は，実践哲学と心理学に依存する，前者は陶冶の目的を示し，後者はその道と危険を示す」と述べた，という記述を目にすることもある（たとえば，船山，1987）。近代的な教育学の体系の中に心理学を位置づけようとしたこの記述は，教育心理学のはじまりといえるのかもしれない。

しかし，著者には，今日の教育心理学とHerbartの哲学との間に直接的な結びつきがあるように思えない。

多くの心理学史のテキストでHerbartの次に教育心理学に関する記述があるのは，E.L.Thorndike（1903）が「教育心理学（Educational Psychology）」というテキストを著したことについてである（たとえば，Thorne, and Henley, 2005）。

ところで，このThorndikeと前述のHerbartとによる２つの出来事の間にはおよそ100年近いブランクがあるが，その間に教育心理学の関してどのような発展があったかについては，たいていの概論書には何の情報もない。とはいえ，1903年にThorndikeによってテキストが作られ，それが売れたのであるから，すでにこの時点で教育心理学という講義が大学や師範学校などの教育機関で開講されていたのは確かなのであろう。

以上のようなことを踏まえ，とりあえず著者はつぎのように考えてみた。おそらく，教育心理学といわれる分野が成立したのはHerbartの著書が出た1806年より以降で，なおかつ，Thorndikeの著書が出版された1903年以前のどこかの時点ということになるのではないだろうか，と。そこで，教育心理学の起源を探る試みは，まずは，この19世紀をほぼ丸ごとカバーする時代の中で何があったかを調べてみることからはじめることにした。

今回は，この19世紀をほぼ丸ごとカバーする時代の前半（およそ1860年代ごろまで）の出来事について著者が知りえたことを報告したい。

手掛かりになった文献

はじめに，何か手短に情報がまとった総説のような文献はないか検索してみた。

著者が探した範囲内で，この時代の教育心理学の歴史について，何らかの意味のある情報がまとまって得られそうな文献はD.C.Charlesによる以下の２つくらいしか見当たらなかった。

①A historical overview of educational psychology.（*Contemporary Educational psychology,* 1976, 1, 76-88.）

②The emergence of educational psychology（J.A.Glover, & R.R.Ronning eds. 1987 *Historical foundation of educational psychology*, Plenum.Pp. 17-38.（なお，この章のほか，同書のIntroduction (Glover, & Ronning著 Pp.3-15.）にも，少しばかりだが，参考になる情報が含まれていた）

これらの文献では，まず，教育心理学の前史として，16世紀の思想家，J.L.Vives（1493-1540）の記述のなかに教育心理学の萌芽が見られることを紹介している。そして，つぎにJ.H.Pestalozzi（1746-1827）の教育論，学校における実践活動などがとりあげられ，その学校に訪問し影響を受けた一人にHerbartがいたことなどが述べられている。ただ，これらの出来事が今日の教育心理学に具体的にどう影響していたかについての記述はとくになかった。おそらく，これら出来事と今日の教育心理学との間には直接的なつながりないとみて間違いなかろう。

Charlesの２つの文献では，つぎに，19世紀のアメリカにおいて教員養成の中で心理学が取り入れられていったことが紹介されていた。もちろん，この事実と，それ以前のPestalozziやHerbartとの関連性についての言及はない。どうやら，Charlesは，教育心理学の思想的な系譜をたどることはあきらめたようだ。そして，その代わり，彼は，教員養成の中で心理学に関する講義が開設された実績を探ることで，教員養成における心理学（≒教育心理学）の起源を明らかにしようという戦略をとったのである。

もちろん，この戦略が正しいのかどうかは著者にはよくわからない。ただ，現状では著者にはほかに手立てがないので，とりあえず，この戦略に追随しながら批判的に検討を加えてみることにした。

レキシントン師範学校における最初の講義

上記文献によれば，教員養成の中で心理学の授業が開かれたことが確認できるのは，1839年，マサチューセッツ州のレキシントン師範学校で開かれたもので，“Mental Philosophy”というタイトルだったようだ。レキシントン師範学校（Lexington Normal School）はアメリカで最初の公立師範学校で，1839年設立とあるから（Ogren, 2005），心理学に関する授業は，当初からカリキュラムの中にあったということになる。

では，この“Mental Philosophy”という授業はどのような内容で行われたのであろうか。いうまでもないこと

だが，Wundtの実験心理学の成立は1870年代であるから，この授業はいわゆる実験心理学をベースにしたものではないことは明らかだろう[注1]。しかし，残念ながら，今回参考にした２つの文献には，この授業内容がどのようなものであったかについての記述はなかった。

どのようなテキストが使われていたのか（１）―AbercrombieのMental Philosophy

そこで，別の角度から探ってみることにした。つまり，その授業でテキストとして使用されていた可能性のある書籍を探してみることにしたのである。文献をあたってみると，そのような書籍が2点ほどあることが分かった。そこで，まず，その可能性のある２点の書籍の実物を検討してみることにした。そうすることで授業内容についておおよその見当がつくのではないかと思ったからである。

まず，１点目の書籍について。Borrowman（1956 p.63）の著書に次のような記述があった。それは，レキシントンの師範学校では1865年以前にPeirceの学生たちがJ. Abercrombieの「Mental Philosophy」を熱心に研究していたというものである。

このJ. Abercrombieの「Mental Philosophy」の具体的な書名は「Inquiries Concerning Intellectual Powers, Investigetion of Truth」1832（Borrowmanの著書の脚注では1839　p.63）と思われる。

このBorrowmanの記述は時期が1865年以前とあいまいなもので，レキシントンで“Mental Philosophy”が開講された1839年からはずいぶん経過している。しかし，Abercrombieの著書が1830年に出版されていることを考えると，1839年の講義でもこれが使われていた可能性は否定できないと思う。

この著者であるJohn Abercrombie（1780-1844）という人物は，スコットランドのアバディーンの生まれで，エジンバラで学び医師となり，主にエジンバラで医師として活躍しながら，いくつかの哲学的な著作を残している[注2]。この経歴から見ていわゆるスコットランド学派の哲学者と思われる。

スコットランド学派（Scottish School of Common Sense）とは，J. Locke（1632-1704）にはじまるイギリスの哲学がD.Hume（1771-1776）に至り極端な懐疑論に陥り，存在するのは知覚だけであり，心や魂といったものは知覚された感覚の塊に過ぎない，心や魂というものは感覚が束になったに過ぎない，と主張するようになったことへの反論として生まれたものとされる。スコットランド学派の哲学者によれば，「われわれの感官は額面通り受け入れることができる世界について，多くを教えてくれる。そしてひとたびそこに矛盾がおこると，ちょうどアイロンでしわのばすように，われわれの感覚がたよりになる（Roback. 1952　邦訳p.52）」のだという。そして，自分の感覚を頼りに経験を分析し，哲学的な概念について考察を加えている。スコットランド学派の哲学は，実験こそ方法として採用していないが，内観によって心的な機能を見出し，その働きを考察するという意味でのちの心理学に通じるものがあった。Robackによれば，このようなスコットランド学派の哲学は18世紀を通してアメリカにもたらされ，ハーヴァード，プリンストンといった大学に根付いていったのだという。

さて，Abercrombieの著書の内容を見てゆこう。今回参照したのは1832年の第二版である[注3]。表１に目次の邦訳を示した。まず，第１部で意識の存在を常識的に受け入れ，そして，続く第２部では事物と心に関する知識の起源を感覚や知覚に求め，さらに第３部では，それらに対して心的操作を加える意識の機能（記憶，抽象化，イマジネーション，推論，判断など）について考察するという一連の流れは，一見して，これがスコットランド学派の流れを汲むものであることがわかる。

表１「Inquiries Concerning Intellectual Powers, Investigetion of Truth（Abercrombie, 1832）」の目次

第１部　我々の心に関する知識の性質と限界
第２部　事物と心に関する我々の知識の起源（感覚と知覚　意識と省察　証明など）
第３部　知的操作（記憶　抽象化　イマジネーション　推論　判断　知的な異常など）
第４部　医科学に対する哲学的探索の原則の応用（事実の獲得と知覚，事実の結合，分離など，因果関係の追求，一般法則の演繹）
第５部　よく制御された心を構成する特質について（習慣，思考やイマジネーションの制御，道徳的な感情が成立する条件など）

1839年にレキシントン師範学校で開かれた“Mental Philosophy”なる講義でAbercrombieの著書が使われていたとすれば，おそらくはこのようなスコットランド学派の哲学が講じられて可能性が高いとみてよいだろう。

どのようなテキストが使われていたのか（２）―Uphamの“Elements of Intellectual Philosophy”

もう１つの別の可能性を示唆する記述が，Roback（1952）の著書の中にあった。それは，ボウドウェイン・カレッジで哲学を教え，牧師でもあったThomas G. Upham（1789-1872）によって書かれたmental philosophyに関する教科書についての記述である。この教科書は，1827年に「Elements of Intellectual Philosophy」というタイトルで出版され，４年後に「Elements of Mental Philosophy」と改名されたもので，この領域の「決定的な教科書（Roback, 1952）」となり，1886年になっても新しい版が出され続けたとのことである。

もちろん，レキシントン師範学校の授業で，このUphamの教科書が使われたという証拠は何も手に入れることはできなかったが，Robackが決定的な教科書というくらいだから，可能性としては否定できないのではないかと思う。以下，この可能性について考えてみる。著者がその不確かな可能性から論を進めようとしていることには単にRobackが「決定的な教科書」と述べたからという以上の訳がある。それは，Roback(1952)が次のようなことを述べているからである。Robackによれば，「（Uphamがこの教科書で）スコットランド学派

が心理学に与えた名称，「知的」intellectual 哲学を捨てて，その代わりに「精神」mental 哲学[注4]という用語を採用した」（邦訳　p.73）という（同様の記述はFay（1939/1966）の著書にもある。p.92）。著者がこの記述になぜ注目したかというと，そもそもレキシントン師範学校で開講されたmental philosophyという授業名そのものがUphamの教科書に由来すると思われるからである。実際，前に可能性を検討したAbercrombieの著書の書名も「Inquiries Concerning Intellectual Powers, Investigation of Truth」であり，「Mental Philosophy」ではなかった。つまり，レキシントン師範学校の講義が“Mental Philosophy”という授業名を採用したこと自体が，Uphamに準拠した可能性が高いといえるのである。

ところで，ここで気になることがある。Uphamが捨てたIntellectual Philosophyとはいったいどのようなもので，また，どのような理由でそれを捨てたのであろうか。

まず，Intellectual Philosophyとは何をさすのだろうか。Fay（1939/1966）によれば，アメリカでは1820年代から南北戦争（1861-1865）にかけて中等教育の拡大がすすみ同時に旧来の古典語教育などを中心としたラテン・グラマー・スクールからより実用的な科目も教授するアカデミーへの変革が行なわれたが，そのアカデミーで新しく設けられた科目の１つが，“Intellectual Philosophy”だったという。Fay（1939/1966）は，その“Intellectual Philosophy”の内容を構成する哲学者の名前として，J.Witherspoon（1722-1794），S.S.Smih（1750-1819），Ｌ．Hedge（1766-1844）などの名前を挙げているが，これらはRoback（1952）がスコットランド学派の哲学者としてとりあげた人たちと同じである。つまり，intellectual philosophyとはスコットランド学派の流れを汲む哲学なのであろう。そのintellectual philosophyをmental philosophyと改名したのが，Uphamなのである。

そこまではご理解いただけたかと思うが，つぎに２つめの疑問が出てくる。それは，なぜ，intellectual philosophyをmental philosophyと改名する必要があったのかということだ。これについてRobackは明確には述べていないが，Robackは，Uphamの教科書で心理学の「二つの根本的な部門である知性と感性[注5]」に加えて三番目の意志が加えられたと述べていることから，その主な理由が学問領域の広がりにあったという推測はできる。また，少し時代は下るが1857年に出されたHavenの「Mental Philosophy」の序文のなかにも，旧来の教科書が知的能力に限定され「情」や「意」が十分扱われていないという似たような指摘があるという（宇津木，2014）。これらを見ると，この時代を通してスコットランド学派の流れを汲む“旧”心理学が知的領域から感情，意志などの領域を含めたものに変化しつつあったことがわかる。こうしたなかで，Uphamがmental philosophyという用語を採用することを思いついたのかもしれない。

さて，レキシントン師範学校で“Mental Philosophy”の講義のテキストとして使われた可能性のあるUphamの「Elements of Mental Philosophy」だが，その具体的な内容はどのようなものであったのだろうか。この著書も現在ではインターネット上で公開されているが[注6]，上下巻で700ページを超える大部なものなので，とりあえず，目次だけでも参照してみることにした（表２）。なお，今回，参照したものはレキシントン師範学校で“Mental Philosophy”が開講された1839年に出版された第三版である。

表２をご覧いただきたい。第１巻が感覚，知覚，および，知的過程に関するもので，ここが旧来からのスコットランド学派の流れを汲むintellectual psychologyに相当する部分なのであろう。第２巻は第１部で情動，欲望などを，第２部で主として道徳の問題を扱っている。第３部は感情，性向（欲求，性格の傾向）にかかわる異常心理学的な問題を扱っているが，このうち「感情の因果的連合の問題」という部分がわかりにくいかもしれない。これは，Robackによれば意志に関するものとのことである。つまり，目次を検討して見えてくるのは，この教科書はスコットランド学派の哲学の影響を受けつつも知情意の３機能を並置するドイツ由来の能力心理学をその基本的な骨子としていることである。なお，Uphamがドイツ哲学の影響を受けていたことについてはRobackも述べている。

表２「Elements of Mental Philosophy, Embracing the Two Departments of the Intellect and the Sensibilities（T. C. Upham.　1839）」の目次

導入		
第１巻	心の知的側面の理解	
	第１部	外的起源をもつ心の状態（感覚，知覚に関するもの）
	第２部	内的起源をもつ心の状態（観念，連合，記憶，推理，イマジネーションなど）
	第３部	不完全にして無秩序な知的行為（心身の関係，知的な側面を中心とした異常心理学的の諸問題）
第２巻	心の感情状態	
	第１部	心の情動状態（情動とは　情動の種類　欲望など）
	第２部	道徳的感情（道徳と感情　道徳教育など）
	第３部	不完全にして無秩序な感情的行為（欲求や性向（性格），感情などに関連した異常心理学的の諸問題　感情の因果的連合の問題）

最初の授業はどのようなものであったのか

現在のようにシラバスの整備されていない時代の授業内容がどのようなものであったかを知ることはなかなか難しいのだが，とりあえずできることは，上記の２つの教科書の内容から想像してみることだろう。そこから言えば，1839年にレキシントン師範学校で開かれた“Mental Philosophy”の講義は，スコットランド学派の哲学をベースにしながらも，もしかすると，ドイツの能力心理学の影響も強く受けていたかもしれないということだ。いず

れにせよ，60年あまり後に登場し教育心理学のスタンダードとなるThorndikeのそれとはだいぶ異なるものであったと思われる。もちろん，今日，教員養成のカリキュラムに組み込まれている教育心理学とは全く違うもであったといってよいだろう。いずれにせよ，このレキシントン師範学校で開かれていた“Mental Philosophy”の授業の内容は，教育心理学の起源とは呼ぶにはあまりにも違いすぎるものであった。

レキシントンに師範学校おけるMental Philosophyの講義の位置づけ

では，この“Mental Philosophy”はどのような観点から開講されていたのであろうか。この点について考えてみた。

佐久間（2017）によれば，初期の州立師範学校のカリキュラムはおおよそ４つのカテゴリーに分けられていたという。まず，１つめは“小学校の教科内容の復習”ということで“正書法（綴り方）”“作文”“算数・代数・幾何”“地理，統計，一般史”“生理学”“精神哲学”“音楽”“憲法，マサチューセッツ州史および米国史”“自然哲学と天文学”“キリスト教各宗派に共通する道徳性”“教授法”などが列挙されている。精神哲学，つまり，“Mental Philosophy”はこのカテゴリーに属している。２つめは“教授技術および学校統治に関する科目”で“教授技術”“学校の統治に関わること”の２科目が挙げられている。教育方法に関する科目といってよいだろう。そして，３つめが“教育実習”。４つめが“相互教授法”で，これは学生が相互に模擬授業を行うものであった。なお，３つめのカテゴリーと４つめのカテゴリーは広い意味での実習であり１つにまとめることもできるだろう。実際に三好（1972）は師範学校の教育課程を「教科」「方法」「実習」の３側面に分けて論じている（P.104-106）。

さて，この師範学校の教育課程のカテゴリーわけで注目すべきは“Mental Philosophy（精神哲学）”の位置づけである。１つめのカテゴリー，すなわち，“小学校の教科内容の復習”（つまり，「教科」）に含まれているのである。今日の一般的な教職課程に関する科目の区分から考えると，ここは教科内容に関する科目のカテゴリーといえるのだが。そして，２つめのカテゴリー“教授技術および学校統治に関する科目”が教育学に関する諸科目のカテゴリーに相当すると考えれば，”精神哲学“ は，むしろ，この中に入ってもよさそうに思われる。しかし，実際にはそのようにはなっていないのである。一方，１つめのカテゴリーであるが，よく見ると“生理学”“自然哲学と天文学”などの科目も含んでおり，必ずしも，小学校の教科内容と呼ぶにはふさわしいとはいえず，むしろ，リベラルアーツ的な科目のカテゴリーと考えることもできるように思われる。

前述の佐久間（2017）の著書によれば，1830年代までの教師の多くは初等教育を受けたのみの者が多かったようだ。一方，1830年代から40年代にかけての庶民の政治的関心への高まりといった社会の変革は公教育制度の在り方をめぐる議論を巻き起こし，さらには，教師の資質の向上の必要性などが唱えられるようになり，それが（とくに女性教師の増加という背景もあり），レキシントン師範学校の設置につながったという（注７）。また，佐久間によればこの時代に女性のための教師教育の確立に尽力したEma Willard（1787-1870）やCatharine Beecher（1800-1878）は，いずれも大学レベルでの教師教育を目指していたという。

こうしたことを含めて考えてみると，教師教育の中ではじめて開設された心理学関係の授業，すなわち，“Mental Philosophy”は，リベラルアーツ，つまり，教科内容に精通したレベルの高い教師を養成する目的の一環として，当時，大学で行われていた科目をとりいれたものであったといえるのではないだろうか。つまり，師範学校ではじめて開設された心理学関係の授業“Mental Philosophy”は，今日の教育心理学のような観点から開設されたものではなさそうなのである。

オスウェゴのChild Study

さて，前述のCharles の２つの文献にもどろう。それによれば，次に開講された心理学関係の授業の例として1863年にニューヨーク州のオスウェゴ（Oswego）師範学校（正式には師範学校になるのは1866年なので，その前身のOswego training school；Ogren, 2005）の“児童研究（Child Study）”が挙げられている。1839年にレキシントン師範学校で“Mental Philosophy”が開講されてから実に20年以上が経っている。その間，他に例が全くなかったのかどうかは著者にはよくわからない。

Ogren（2005）によれば,1840年代から1850年代にかけてJ.H.Pestalozzi(1746-1827)の思想が広まり,1860年代に入るとそれが教員養成教育にも取り入れられるようになってきたという。オスウェゴでは，校長E.A.SheldonのもとPestalozziの教育法が導入され，実物教授を重視したその方法はオスウェゴ・メソッド（Oswego method）として知られたという。Charles (1976,1987)は，児童研究が具体的にどのような内容だったかとくに述べていないが，Pestalozziの思想の影響下にあったと見てよいだろう。

いずれにしろ，このオスウェゴにおける試みは，上述のスコットランド学派の哲学をベースにした心理学とは別の系譜に属するものがあったことをうかがわせる。

1870年ごろまでのmental philosophyの授業

一方で，やはり1870年ごろまでの師範学校における心理学関係の講義は，“Mental Philosophy”と題されたものが多かったようだ。

Charles（1987）は，アイオワ大学師範学部（normal department）において1866年に“Mental Philosophy”が開講されたと述べている。この記述はLuckey（1903）の著書にもとづくようであったのでこれにあったてみると（p.68），カリキュラム表の中に２学年の冬学期の科目の１つとして“mental philosophy―Wayland”という記述があった。気になるのはWaylandという人物名であるが，おそらく，Francis Wayland（1799-1865）ではないかと思われる。Wayland はBrown大学のmoral philosophy

の教授で学長も務めた人物で，哲学，経済学などの著書を残している。

ただ，Waylandはアイオワ大学で授業が開かれた前年の1865年にすでに亡くなっているから，授業を担当したということはあり得ない。これはおそらく，Waylandの　著　書「The Elements of Intellectual Philosophy (1854)」(注8) を教科書として使用するという意味なのだろう。判然とはしないが，この著書について調べてみた。Roback(1952) はこの著書についてJoseph Havenの「Mental Philosophy」(1857) と並んで「南北戦争の前の十年間に現れた教科書として（中略）注目に値するもの（邦訳p.105)」と述べているから，その可能性は高いのではないかと思う。そこでこの著書を探してみた。表３に目次の抄訳を示す。かなりシンプルなものであるが，おそらくこれもスコットランド学派の哲学の影響下にあるものと思われる。Roback(1952)も「ウェイランドがひきあいに出すのはすべてイギリスの著作，とくにスコットランド学派のものが多い。(邦訳p.109)」と述べていることからもそれは裏付けられる。

表３ “Elements of Intellectual Philosophy” (F. Wyland, 1856)の目次

第１章　知覚の能力
第２章　意識，注意，省察
第３章　オリジナルな連想作用　もしくは，知性の直感
第４章　抽象化
第５章　記憶
第６章　推論
第７章　想像力
第８章　好み（taste）

このほか，Charles(1987 p.20) は，1860年代の出来事として，1869年にはミズーリ大学で心理学に関する科目が開講されたことを記しているが，今回はそちらについては手をつけることができなかった。

このように1870年ごろまでの教師教育における心理学教育は，オスウェゴの児童研究を除けば，教育現場を念頭においた教育心理学というよりもむしろリベラルアーツを志向する心理学に主眼がおかれていたように見える。しかし，これも次のように考えれば不思議はない。つまり，W,Wundtがライプチヒ大学の教授に就任するのは1875年，心理学研究室を設け心理学が正式なカリキュラムとして組み込まれるのは1879年である。それ以前の段階で，基礎心理学（あるいは実験心理学）とその応用分野としての教育心理学が明確に意識されていたかといえば，それはかなり疑問である。そうした状況を考えれば，心理学が師範学校の中でよりリベラルアーツとしての側面を強めようとしていた可能性も，十分にあり得るのである。

むすびに代えて

さて，はじめにものべたように，著者は，教育心理学といわれる分野が成立したのはHerbartの著書が出た1806年以降で，なおかつ，Thorndikeの著書が出版された1903年以前のどこかの時点という仮説を立てた。そして，本稿では，このおよそ100年の前半で教育心理学の起源や発展に関連してどのような事柄があったかを探ってみることにした。今，ようやく，その前半の終わり（1860年代）に達しようとしているが，ここまでの検討によって知りえたものは，残念ながら，それほど多くはなかった。

著者は，自らの力不足を痛感させられることになったが，それ以上に，何故かくも教育心理学の歴史研究が少ないのか考え込んでしまった。

著者は，前段で，教育心理学の起源に位置付けられる領域が当時師範学校で教授されていたスコットランド学派の哲学由来のmental philosophyなど講義に相当し，それは今日ではあたりまえになりつつある教育実践を支援する学としての教育心理学とは異なる，むしろ，リベラルアーツを志向するものであった可能性を示唆した。著者は，もしかすると，そうしたリベラルアーツ重視の方向性が，今日までつづく「教育心理学は独自の研究の少ない借り物の寄せ集め」によって成り立っている領域という批判の出発点だったのかもしれないと感じた。また，借り物の寄せ集めによってなりたっている教育心理学に独自の歴史研究など必要性はなく，そのため教育心理学の歴史研究が極端に少ないという状況を招いた可能性も十分に考えられる。つまり，それが教育心理学の歴史研究が少ない理由なのではないかと思われた。

もちろん，これは著者の想像の域を出ない。いうまでもなく，今回は手つかずになってしまった1870年代からThorndikeの著作（1903年）に至る教育心理学がたどってきた道筋をもう少し検討してみなくてはならない。

そのような意味でも，本稿は未完の感のぬぐえないものなのだが，とりえず今回はここまでとし，つづきは次回に譲りたい。

注

（注１）ところで，アメリカに実験心理学が輸入されるのは，これよりかなり遅れて1880年代になるが，当初，実験心理学は“新”心理学と呼ばれていた。これは，“旧”心理学としてのmental philosophyやintellectual philosophyに対するものとして位置づけられていたからである。

（注２）https://www.rcpe.ac.uk/heritage/college-history/john-abercrombie　(2019.10.8　閲覧)

（注３）https://collections.nlm.nih.gov/catalog/nlm:nlmuid-101241221-bk　(2019.10.7.　閲覧)

（注４）日本語の心理学という訳語をはじめて用いたのは西周（1829-1897）であることはよく知られているが，これは西がJoseph Havenの著書「Mental Philosophy」(1857) を「心理学」と訳したことによる。

（注５）感性（sense）は，ここでは，主として感覚，知覚のこと。

（注６）https://catalog.hathitrust.org/Record/008621461 (2019.10.7.　閲覧)

（注７）申し遅れたが，レキシントン師範学校は女子師範学校として開設された。設立の経緯については佐久間(2017)の著書の第５章に詳しい。

（注８）https://archive.org/details/elementsintelle00waylgoog/page/n6　(2019.10.7.　閲覧)

引用文献

Borrowman, M.L.(1956)*Liberal and technical in teacher education: A historical survey of American Thought*. Bureau of publication, Teacher college, Columbia University.

Chapman,P.D.（1990）*Schools as sorters: Lewis M. Terman, applied psychology, and the Intelligence Testing Movement, 1890–1930*. New York University Press.

Charles, D.C.（1976）A historical overview of educational psychology. *Contemporary Educational Psychology*, 1, 76–88.

Charles, D.C.（1987）The emergence of educational psychology.　In J.A.Glover, & R.R.Ronning eds. *Historical foundation of educational psychology*, Plenum. Pp. 17–38.

Fay, J.W.（1939/1966）*American psychology before William James*. Octagon Books

船山俊明（1987）教育の科学化への歩み　田中克佳（編著）　教育史　川島書店　Pp116-124.

Glover, J.A. & Ronning, P.R.（1987）Introduction. In J. A.Glover, & R.R.Ronning eds. 1987 *Historical foundation of educational psychology,* Plenum. Pp. 3–15.

Kardas, E.P.（2014）*History of psychology: The making of a science*. Wadsworth.

Luckey G.W.A.（1903）*The professional training of secondary teachers in the United States*. Macmillan.

三好信浩　(1972)　教師教育の成立と発展―アメリカ教師教育制度史論―　東洋館出版

大芦　治　(2016)　心理学史　ナカニシヤ出版

Ogren, C.A.（2005）*The American state normal school: An instrument of great good*. Palgrave Macmillaan.

Roback, A.A.（1952）　*History of American psychology*. Library Publishers　堀川直義,南博共訳　(1967）アメリカ心理学史　法政大学出版局

佐久間亜紀　(2017)　アメリカ教師教育史―教職の女性化と専門職化の相克―　東京大学出版会

Thorne, M.B. & Henley, T.B.（2005）*Connections in the history and system s of psychology*（3rd. ed.）. Wadsworth.

Thorndike, E.L.（1903）*Educational Psychology*. Lemcke and Buechner.

宇津木成介　(2014)　ジョセフ・ヘイヴンの『心理学』: 訳者西周と，少しだけヴェブレンについて 奈良学園大学紀要, 1, 149–159.